

トーマス・G・ハーディング著

『草原の民——パプアニューギニアの一社会における農耕体系——』

Thomas G. Harding, *Kunai Men: Horticultural Systems of a Papua New Guinea Society*, パークレイ, University of California Press, 1985年, 100ページ

本書は著者T・G・ハーディングが1963年から64年にかけてニューギニア島北東岸で行なったオーストロネシア系言語を持つシオ族に関する人類学的フィールドワークにもとづいて書かれた民族誌である。

著者はすでにシオ族を一環とする地域交易体系について記した *Voyagers of the Vitiaz Strait* (シアトル, University of Washington Press, 1967年) を発表しており, 本書とあわせて, 生産と交換という経済現象の2側面を包括する。

本書はそのうち, 生産に関する叙述であり, 次のような章構成のもとに論ぜられていく。

序章

第1章 環境およびシオ族の生産における農耕の位置

第2章 伝統的シオ農民

第3章 変動する体制に対する適応

第4章 現代のシオ農民

第5章 経済変化, 社会的地位およびカーゴ主義

われわれもまたその順序に従って, 各章ごとにその内容を見ていこう。

I

第1章. シオ族の居地の生態的背景説明が行なわれ, 農耕が全生産活動中に持つ位置が述べられる。

シオ族はニューギニア島北東岸の小さな海岸平野を領域とする人口1436人(1962年)のオーストロネシア系の小言語集団である。海岸に沿って珊瑚礁が走り, その内側4~5キロほどに広がる草原を経て, 熱帯雨林に至る彼らのテリトリーの中で農耕活動が集中するのは「クナイ」とピジン英語で呼ばれるイネ科の高草が茂る草原である。人々がかつては海岸から200メートルほど沖合のシオ島に家を建て, 舟で本土に農耕をしに渡って往復していたが, 第2次大戦中, 連合軍の誤認による爆撃のため島が焼土と化し住居を本土に移した。

ニューギニア北岸は太平洋に面し, 一般に南東貿易風

と北西モンスーンの交代が明確に雨期と乾期を分かち地域であるが, シオ島においてもそれは顕著に現われ, 1年の総降雨量の75%以上が12月から3月までに集中する。統計(9ページ, 第1表)を見ると8, 9月の降雨は月に1~3日程度, 月降水量も1~12ミリ程度である(12~3月は月降水量100~750ミリ)。このことが土壌の性質とあいまってシオ族の農耕活動に大きな制約条件を課している。

農耕以外の経済活動としては海を利しての漁撈, 交易, そのためのカヌー製作, そして土を利しての主要交易物である土器の製作などがある。

第2章. シオ族はヤム芋とマミ芋を主食とする根茎植物栽培民である。農耕は焼畑耕作により, 畑の火入れから植付けが乾期全体にわたって行なわれ, 収穫は1~6月に集中する。そして12~15カ月耕作に供されると最低3~4年は休閑地として放置される。

シオ族は全体が二つの半族に分かれ, 各半族はさらにいくつかの小さな父系リニジに分れる。父系リニジは居住の上でも一かたまりとなり, 各々集会所の家を持ち, それをめぐってさまざまな儀式, 政治活動が行なわれていた。このような分割を加える半面, シオ文化は社会の成員を切れ目なく拡がる親せき関係の輪によって結びつけられているものと見なし, このことによってシオ社会は内部に走る切れ目を越えた連続性を獲得する。

しかし再び親せき関係の複雑なネットワークは何世代かをさかのぼって共通の先祖に至るという原理(双系出自)によって整列をうけ, 社会のなかに切れ目を入れる。たとえば曾祖父母のいずれか1人をともにする男女は結婚できない。さらに6世代以上うえの先祖はシオ島に漂着してきてシオ社会を形成した始祖たちであるとみなされる。これら始祖たちは異なったさまざまな地域, さまざまなグループから集まってきたものと考えられ, 現在生きているその子孫たちは自分の先祖の故郷はどこそこの地域, どこそこの島であったということをはっきり意識している。このことによってシオ族の成員たちの関係ネットワークはシオ社会を越えて外の世界へのびていく。それはとりわけ異域住民との交易パートナーシップという形をとって現われる。

農耕活動の大半は核家族世帯によって担われ, 耕地もまた各世帯ごとに分割されていた。ただし, 植付前の火入れと耕起は世帯を越えた協同作業が見られた。火入れは同時に野ブタ狩りでもあり, 数週間にわたって行なわれ, 村の男全員が参加する。耕作は3~4人の男と彼らの年下の親せきの男たち(見習いとして)および男たち

の妻たちがチームをつくって行なった。

第3章。タイトルはもってまわった、しかも不適切でまぎらわしいものであるが、章の内容は食物の不足をどう補うかということにすぎない。

シオ族のテリトリーは極端に少雨の乾期をもつ。このため降雨次第で収穫は非常に不安定となり、常に飢餓の脅威にさらされている。それに対する危機対策が一つには野生植物の採取であり、さらには交易活動であった。シオ族は自村の産品である土器、ココナツ、魚とひきかえにタロ芋やサツマ芋など主食食物を得て、収穫期の始まる前の空腹の2カ月を凌いでいた。

第4章。著者はシオ族が近代文明のなかに組みこまれていくなかでどう変化していったのかをいくつかの要因に見ていく。

テクノロジーは次のように変わった。まず鉄器の導入である。鉄の農具が手にはいるようになったことによってそれまで耕作の対象とならなかった森林の開拓を容易にし、労働効率を2~3倍に高め、そのことによって土地の耕起における共同労働の必要性がなくなり、世帯の生産単位としての独立性をより一層促進することとなった。

新種の作物の導入も行なわれた。白人たちの手によってキャッサバ、トウモロコシ、カボチャ、それにサツマ芋やタロ芋の新種がもたらされた。

経済的には、それまでのヤム芋栽培を中心とした自足的な食物生産に加えて換金作物であるコブラ生産による現金収入、および村の外における現金収入による新たな経済サイクルが始まった。特に賃労働は村から成人男子を吸い出し、1962年時点では16歳から45歳までの男子のうち、村外流出者は66.5%にもものぼった。

このため、農耕活動は女に大きくしわよせされることとなった。同時に、成人男子の大量流出は白人行政官および宣教師らによる旧習禁圧とあいまって、集会の家とそれをめぐる社会組織と儀礼体系を崩壊させた。

1964年時点で村の共同性を担って最も機能している組織としては、かつては副次的であった制度、パサウガ(pasauga)集会有る。これは全シオ族男子が集まるもので、教員を務める村の有能な男の、議長としてのインシアティブのもとに活性化されたものである。討議のテーマは広範であるが、著者のあげている二つの集会の事例をみると、公共施設(保健所、飛行場、教会、学校)の建設・維持に関するものと社会倫理一般(子供たちの品行としつけのいたらなさ、労働倫理の衰退、うわさや陰口の弊害)に関するものの2種に分けられそうであ

る。この議長はサツマ芋農園を全村あげてつくることを呼びかけ8名のサツマ芋農園がつくられた。しかし、この集会には決定を参加者に強制する手段が欠ける。実行はすべて個々の参加者の自発性に委ねられているのである。

第5章。第4章の続きである。著者はまず前章で述べた白人社会との接触開始後生じた経済的变化の主たるものを要約列挙する。鉄器の導入とそれによる作業効率の増大、新種作物の導入、それに貨幣収入によって可能になった食料品購入などが不安定だった食料の確保を確実にしたものとした。

同時に進行した男たちの賃金収入を求めての村外流出は女たちに大きく農耕負担を負わせることになったが、これも鉄器による作業効率の拡大によって可能となった。換金作物は生産物を市場に有効に連結する媒体(道路や販売組織)を欠いているために十全に利用されているとはいえない。

こうした経済的变化のもとで貨幣収入はシオ族の社会的地位関係のあり方を変化させている。

まず貨幣を手にして村へ帰った者たちが始めたのはトタン屋根と製材された板を使っの「モダンな」家を建て、完成時に大盤振舞いをするによる威信獲得競争であった。

1959年以降は、新たに雑貨店をつくって商売をすることが、元手となる金を持つ男たちの競争的となった。金を持つ男たちは競って店を建て、1964年時点で250戸ほどの自給的なシオ村に6軒の雑貨店が現われた。ここにおいても問題は利益ではなく、威信獲得競争である。

白人社会と接触した直後からシオ族は自ら旧来の慣行や制度を抛った。それはキリスト教を始めとする白人たちの制度をとり入れることによって彼らのもつ圧倒的な富と力を自分たちも手にすることができると思ったためである。

当然ながらそれは到底実現することのできない希望であった。シオ族の男たちは一刻も早く願望と現実の巨大な落差を埋めようと、抜本的解決手段だと彼らの眼に映った動きに繰り返して飛び乗り、そのたびに空しく裏切られた。人々は相も変わらぬ願望と現実の落差を前に強い欲求不満の状態にある。

白人到来前は農耕が人々に富と力と威信と安全とを与えてくれる間違いのない確実な手段であった。しかし、今や、生計はともかく、人々の願望と目標の実現にとって農耕は何の役にも立たない。

シオ族の男たちの眼には、個々の願望実現への試みが

失敗なのではなく、彼らの生そのものが失敗なのだと映っているようだ、と著者は本書を結ぶのである。

II

民族誌、ことに価値ある民族誌というものは読み手の視点によって無尽蔵とは言わぬまでも、人間存在に対する考察の手がかりを数多く提供してくれるものである。それゆえ、それは読者の関心によってさまざまに読まれてよい。著者の考える主旨から少しそれたところに置かれた小さなディテールから重要な発見がなされることもあるのだから。たとえば、エルツによるさまざまな文化を貫通する右の左に対する優越の象徴性の発見、レヴィ＝ストロースの生のもの、料理されたものというカテゴリー対立による文化の秩序付け原理の発見などは、細部の記述から人間存在を一気に通貫する透察を得た好例である。

とまれ、民族誌の魅力の半分は行の幹道から少しはずれた道をそぞろ歩いた時に見出すさまざまな断片にある。

私はすでに本書の幹道についての紹介は十分に行なった。今は、著者の意図から少し離れて私が興味をひかれないいくつかの事柄の一つを語ってみよう。

M・D・サーリンズ (Marshall D. Sahlins) の半ば古典的となった論文 (“Poor Man, Rich Man, Big Man, Chief” (註1)) はメラネシアとポリネシアの諸社会をサンプルに政治的リーダーシップの形態分類とそれをめぐる要因を論じたものであり、そこにおいて彼はメラネシアに優勢な個人の資質にもとづいて獲得されるビッグマンと称されるリーダーの形態とポリネシアにおいて一般的な世襲ルールによって自動的に継承される首長と定義されるリーダーの形態を区分した。サーリンズの要因論はその後の民族誌による経験的検証にややたえない面もあるが、少なくともビッグマン型社会と首長型社会の区分はオセアニア研究においては基本タームとして普遍的流通力を得、われわれもその枠組に乗って議論している。

本書の主人公であるシオ族は著者によればビッグマン型社会を成し、世襲的地位としての首長職の存在を欠くというが、同じくビッグマン型社会と呼ばれるニューギニア高地の諸民族と比べるとその内実は随分異なる。

シオ社会におけるビッグマン (と著者が呼ぶ者) は現地社会ではマロ (maro) と呼ばれる父系リニジ (mbonza) の長であり、同時にリニジの中核をなす集会の家の長でもある地位にある者のことを指すが、彼はニューギニア

高地には見られない五つの特徴を持っている。

第1はタブー設定権を持っていることである。マロは自らのンボンザ (mbonza) が他のンボンザに食物を儀式的に与える贈与儀式 (wena) に供するため、ココナツの樹をタブーとして時がくるまで実に触れることを許さない。これを破る者があれば祖霊の怒りを呼び起こし、それを鎮めるためにはブタをほふって祖霊に供えねばならない。それは瀆聖行為なのである。

ニューギニア高地諸社会のリーダーたちはこれに類する聖化権能を持たない。私の調査したインボング族や近隣のンボワンプ (メルパとも) 族はミという一種のタブーを持つが、それはリーダーのみに与えられた権能ではなく、各人のものである。何人もこれを犯すべからず、と自らの所有物と主張するものに小枝を立てかけるのだが、シオ社会のタブーとは根本的に性格を異にする。すなわち、リーダーがグループ全体を代表して全体に向かって全体が共同の目的で用いる財にタブーをかけるという質のものではない。

第2に、マロは贈与儀式用に日常の食用に供するものとは別に、それよりはるかに長大な特別の種類 Yamu (芋) を幾人かの主要メンバーと秘密裏に計画をたて植えつける。この「はれ」のYamu芋は贈与儀式においてブタとともに主たる引き出物をなし、与える側はその長さを紐ではかつて結び目をつけ魚拓のように保存する。ンボンザ同士の競争は与えた食物の総量ではなく、この「はれ」のYamu芋の最大の長さによって比べられた。マロは贈与儀式の成否の鍵をなすこのYamu芋の生産と監督の責任をリニジ全体に対して負うのである。

贈与儀式に関して第3に、マロはリニジを代表する分配権を持っている。贈与儀式に際してリニジは一つの高台を建て、そのうえに囲いをつくり、そのなかにYamu芋を始めとする贈与の食物を陳列する。囲いの中央には柱が建てられ、それにはココナツの実が取り付けられている。高台の下には贈与に供するブタが繋がれている。食物やブタはリニジの各成員の寄与になるものだが、ここにそれは一つに集められ、リニジ全体の名においてマロおよび彼の任命する (通常は彼の弟がとりもつ) 分配役ドゥムイ (dumui) が相手グループに分配するのである。

インボング族のブタの贈与儀式マガリは、やはりビッグマンがブタを他のグループに分け与えるのだが、本贈与の前には必ず、ビッグマンを助け彼に贈与用のブタを与える支持者たちからビッグマンへの贈与儀式が行なわれる。シオ族の場合は、リニジ成員はリニジの一員とし

てリニジにブタや食物を提供するのだが、インボン族の場合は、支持者が個人として、同じく個人としてのビッグマンに贈与するのである。

第4に、ドゥムイはマロのスポークスマンの役目を果たす。マロのメッセージはドゥムイの口をとおして、ちょうどモーゼのメッセージがアロンの口をとおして伝えられるように、リニジに伝えられる。

ニューギニア高地のビッグマンは公開の論戦で他のメンバーと同じ資格で演説をする。そして彼が人々を一つの行動にまとめるのは演説による説得を通じてである。それは当然のことながら反論を予期しており、実際反論に出会う。そこにはシオ族のマロのメッセージがスポークスマンを通じて伝えられることに見られるような一方向性はない。マロの言葉はドゥムイの口を通して語られることによって、人間の口から直接語られることから解放され、一種の絶対的響きを帯びるように思われる。「嘆願者はマロに声をかけられるまで、黙ってじっと座って待った」(44ページ)という記述はこの推測を裏付けるように思われる。

そのことと深く関連して、最後に、マロは「ある種宗教的オーラを帯びていた」(同ページ)。そのため人々は「マロの前を通りすぎる時、頭と肩を屈め、地面低くうづくまるようにして通った」(同ページ)という。

一種、身分社会的秩序を思わせるこのような身振りがビッグマンに対して示されることは、ニューギニア高地社会においてはおよそ想像を絶する事態である。高地のビッグマンはいかなる聖性の担い手でもない。彼のリーダーシップは一に、この世における彼の個人としての有能に負うものであり、超越性の関与する余地はない。

シオ社会においてはマロは宗教的オーラを帯び、その超越性が今度は最初に述べた彼のタブー設定権能につながっていくのである。

以上、ニューギニア高地のビッグマンとの比較のもとに浮かびあがるマロの五つの互に密接に絡まりあった特性は、個によって構成される集合を超え、その上に君臨する超越的全体性の存在とその人格的代表化というメカニズムに淵源するように思われる。

そう見た時、マロの存在を支える論理はニューギニア高地諸社会におけるリーダーシップを支えるそれとは全く異質であり、むしろ首長型社会によって立つ論理と同質である。それゆえ、世襲的地位の継承の有無にもとづく社会のタイポロジーは今一度、再考を要する。むしろ、リーダーシップの作用のしかたを支える論理型こそ

より肝要なのではないかと思われるのである。そして、サーリンズの議論に関連して述べるなら、メラネシアのビッグマンかポリネシアの首長かではなく(シオ社会はその枠組においてはメラネシアのビッグマン型に属する)、オーストロネシア系諸民族の社会の全体化作用を支える論理型が働いているか否かが分岐点を成すと私は考える。

シオ族は、私に言わせれば、その言語同様ポリネシアの首長制社会をつくっている諸民族や、ニューギニアでも首長を載くトロブリアンド(Trobriland)諸島民やメケオ(Mekeo)族などとともに、オーストロネシア系文化系列のうえにのっているのである。

それはすでに概要紹介のなかで触れた双系出自原理の出現にも、またそこでは紹介しなかったがキョウダイカテゴリーが年齢序列に従って兄(tuwongn)と弟(tengu)に親族呼称上分かれていること、すなわち兄弟序列の存在(ニューギニア高地では同性キョウダイは兄と弟のカテゴリーに分かれず一つの語で表わされる)、それと関連してリニジの「土地の父」(tono toma)の称号が長子の長子という系列をとおして伝えられていくこと、さらには物質文化において土器製作民であることにも連なっていく。これらはオーストロネシア系諸民族に強い偏倚を持つ文化要素なのである。

オーストロネシア系諸民族は6000年(注2)の時の経過の間に南太平洋全域に拡散する過程で、土地ごとにさまざまに変異していったが、にもかかわらず、原オーストロネシア語が再構成されるのと同様に、その原基的文化型とも呼ぶべきものを共有しているように思われるのである。

それに対し、メラネシアの非オーストロネシア系諸民族はオーストロネシア系諸民族とは全く起源を異にすると同時に、その内部においても、いくつかの本質的に異なった論理型の作用が見られるのである。

そのことについて議論を進めていくには、書評の範囲を超え、一つの綿密な検討の場を必要とする。それゆえ、稿を新たにして論ずることにしよう。

(注1) Sahlins, M. D., "Poor Man, Rich Man, Big Man, Chief: Political Types in Melanesia and Polynesia," *Comparative Studies in Society and History*, 第5号, 1963年。

(注2) 論者によってタイムスパンは異なる。考古学的推定には避け得ないことであるが。

塩田光喜(アジア経済研究所地域研究部)